We 25R

No.324　14/02/03

リケジョの活躍

福岡伸一先生が名著『生物と無生物のあいだ』で確か述べていらしたと思うのだが、何か実験を行って思い通りの結果が得られなかった時に、そもそも仮説が誤っていたのか、実験の過程に問題があったのか、それともデータの解析が誤っているのか、など、さまざまな要因を冷静に分析して、その実験結果（失敗）を意義づけなければならないわけだが、仮説を提示している本人としては、なかなか自分の仮説が誤っていることを認めるのは難しいそうだ。まあ、それは容易に想像できることではある。

＊

先週の話題は、なんといってもSTAP細胞である。山中教授のiPS細胞よりも簡単・短時間に、しかも癌化の可能性が少ないとされる万能細胞を作製するという画期的な技術を、若い割烹着姿の「リケジョ」が開発したというのだから話題にならない方がおかしいだろう。その小保方さん（と彼女の研究グループ）に関する報告が、週末のニュースでは多く取りあげられていた。当初、「生物学の歴史を愚弄するのか」とも言われた研究が、結局は正しかったというのもおもしろい。実験による再現可能性がその基礎にある。

＊

日曜日の朝日新聞「GLOBE」今週号は果物に関する特集だった。

戦後、日本人が最も親しんできた果物はミカンだろう。国内収穫量はピーク時の1975年に367万t。1個100gで単純計算すると、国民1人あたり年に327個分になる。それが、2012年には85万tと4分の1以下に激減。年間購入量は04年にバナナに抜かれ、家庭の果物の主役から陥落した。ミカンに何があったのか。

「何があったのか」と問いかけられているが、その答えは思い浮かぶだろうか？（ちなみに、「バナナに抜かれ」というのも、私としてはかなり意外な感じを受けるが…笑）

確かに、昔は家族がコタツを囲んで談笑しながらミカンを食べる…といった場面が、一般家庭でも、また、テレビ番組の一場面としてもよく見られたような気がするが、最近は見かけられなくなったのではないだろうか。その原因は、次のように分析されていてなかなか興味深い。

菓子やアイスクリームなど、おやつやデザートになる軽食が安く出回るようになると、ミカン離れが起きた。74年にはセブンイレブンが東京に国内1号店をオープン。農林中金総研基礎研究部長の清水徹朗は「好きな時にコンビニで甘味が買えるようになり、果物を食べる機会が減った」と分析する。

なるほどね。その結果、

ミカンは供給過剰になり、多くの農家が、よりもうかる果物に乗り換えた。カンキツ類では伊予柑や甘夏、清見、はるみなど。イチゴやキウイに移る地域も現れた。さらにバナナ、パイナップル、オレンジなど輸入品も加わり、果物の選択肢は増えた。果物商として創業したスーパーの紀ノ国屋が現在、年間に扱う果物は最大約340品目に上り、20年前に比べて1.5～2倍に増えたという。

現在、みかん生産地では新しい「エース」探しに力を注いでいるのだそうだ。つまり新しい品種の開発である。こんな場面でも「リケジョ」が活躍するのだろう。